西洋見聞圖解 前輯 全

= 1
1510
1

1510
1-2

西洋見聞圖解

瓜生政和著

東京書肆
二書房發行

開卷有益

松濤生遺稿

目録

○日月并地球の説
○日輪より世界をこんるの図
○五大洋并大洋の説
○世界高山の説
○噴湯山の説
○世界大河の里数
○水却衣の説
○世界人員の説
○同人種の説
○地体海山平地割合の図説
○引力遠力の図説
○山并海の説
○噴火山の説
○鑛山の説
○泳気撞の説
○世界第一の大船
○同男女風俗の説
○同宗旨の説
○蒸気機関の説
○同船の説
○伽伝機の説
○避雷柱の説
○犬の説
○獅の説
○猟猴の説
○雪獣の説
○拖多の説
○蒸気車の説
○瓦斯灯の説
○狭地発明の説
○風船の説
○象の説
○虎の説
○駱駝の説
○狼の説
○鷙の説

○通計三十六員

凡例

一千八百何年とあるハ西洋の紀元より不して何年おとるハ明治四辛未年よりなり

一里程ハ日本の三十六丁一里と用ひ尺度ハ曲尺とす

一金銀ハ六十匁を一封として何匁分と記し

一法書ハ洋ハ出せしものハ壬大器と著るまでなり

一俗ハ流るゝもの又ハ流りても篠ゝ微細と称し

雑も綿抜ゝまゝ程度のわくるゝ事なども文体長

短あり[illegible]かゝざるハ是の謂なり

東京　瓜生政和編集

日月並地球の説

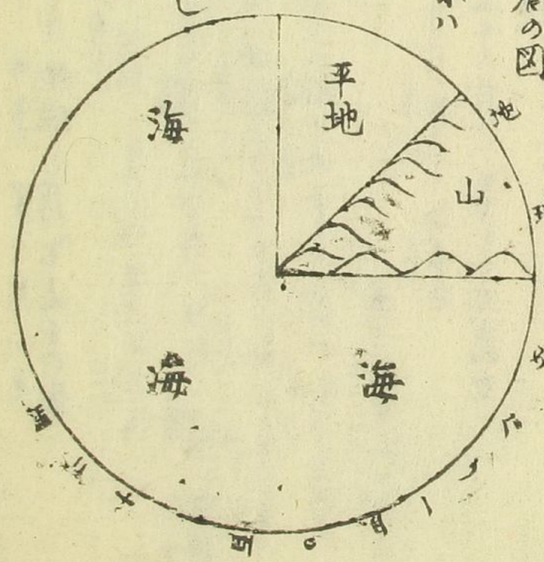
地球ハ大陽の周圍を巡る遊星の一ツにして月ハ地球の附属の星なり世界と人の住居ハ譬へて見れば大空ハ天井地球ハ畳の上地極極樂ハ縁の下の様ハ思ひしれども然ハ非ず月星の世界より地球を見れば地球より月星を見るが如く矢張大空の中ハ一点と光りて見るなり夫が証拠ハ東へ向けて船を何処までも走らすれば周圍を巡りて西より帰り

来り西へ向けて船と何処までも走らすれば周囲を巡りて東より
帰り来るあり然して船の往処に従がひ仰向て上を見れば皆蒼
蒼たる大空にして更に變りなる所なし又地上の丸くして勾配ある
と海の沖中より来る蒸気船にて知るべし初め海の水の上
遥かに烟りの上るを見る因りて向ふ地に火をふてもやらんと怪
しむうちに僅に帆柱の先顕われ出彼の帆柱あらん〳〵長くあり終
に船の甲板を見せ續いて全体を見るに至る地球大なりとの説
直経六七里隔つれば知るべし大船も丸き勾配の下に入りて見ゆる
ことあり故に遠江の沖中より来る船先づ富士山の項上を見

夫より身延の七面山箱根の駒ヶ嶽伊豆の天城山駿河の
愛鷹山と段々に高き項上ようやく見え来るあり

○地球海山平地割合の図

此地球の形は前に述べしが如く海と山と平地とに分
るべし此割合あること左の如し
地球を八つに割にして六つを海と
二つを平地とし二つを山と
なすなり



○日の世界より地球と月とをみるの圖

○日月とわれ対しうるのかたちあり

天をさすも月しれどふたつのれど月は距離

遠く日は距離をさやをうう係ふ云へば日は

地球の視方地球は月の視方をもて為すべし

○日月の地球へのおもさ

三千八百九十五万七千五百四里

○日月の丸のさしわり

三千六万里

○地球の丸のさしわり

三千二百四十七里

○月月の丸のさしわり

八百五十五里

地球

月

日月の距離

九万八千百十里

西

○地球日月の周囲と分度すなわち

二億四千八十六万七千里

地球は日のめぐりと

一年かかって

一とまわりする

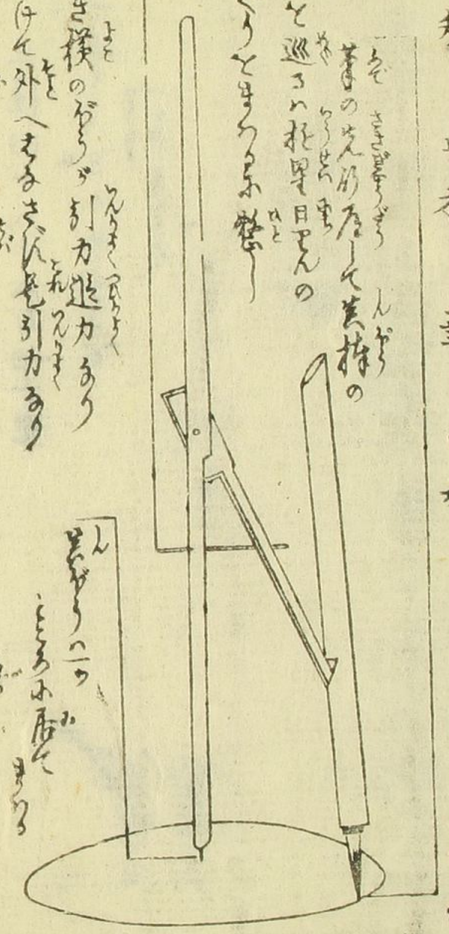
○引力追力の説

日月星辰空中に在て万古行道を違へざる引力追力のあす

ところにて日輪に地球と引んとし地球は日輪に近付んとす

然れども追力とて相互ひに離れんとするの力もあれば引ん

すなはちある力と離れんとするある力と相互ひに持合て確乎たるぜんきゅうしんぐうふでるを筆規の真棒と筆とのごとくなり図をえがくべし



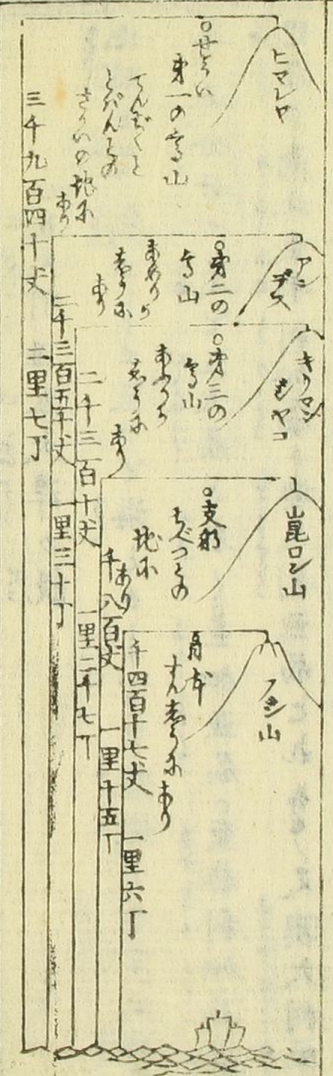
さわさき棒のぐるぐる引力進力あり
引つけん外へまるさんを引力あり
突ちらして押しあ側へ
毛進力あり然して筆の先よく真棒の
関囲をかたづけ引力進力とのたれをし

○五大州 亜五大洋の説

地球を四ツ割ホーして三ツを海とする一ツを陸地とする又陸地を五ツに分けて是を五大洲と名く亜細亜洲。亜非利加洲。歐羅巴洲。南北亜米利加洲。澳大利亜洲これなり又澳大利亜洲へ其國の近き傍りの島嶼を併せ阿西亜尼亜洲ともいふ海も又五ツに別ツ所謂。大平洋。印度洋。大西洋。北冰海。南冰海是なり然れども洋ハ世界中へ續きて切々のものゆへ非ず亜細亜亜非利加、歐羅巴と地續きなれども境界を付て三大洲とするものと同じ

○山並海の説

地球の表面ハ高低凸凹ありて大いなる凹ミへ塩水を満しめる処を海といひ小狭き凹ミへ水を湛へる処を湖とあす又陸地の高く空へ突出しる処を山とらふ今地球中の最高き山の一二を挙て左ハ圖す



山の高さ一千四百丈ハ達もれバ日輪真下の大熱國といへども年中雪絶ることあり

世界中ハ我國淺間山の如く燃る山三百餘ハどありとらふ

ども第一の噴火山とするものハ南亜米利加加の「カトハチシー山」より海面より高きを一里半ハして峯頭より噴昇る火焔八丁余火を噴出す音三十二三里の外まで聞ゆるとらふ

山中より温泉の湧出す処数限りなしーとらへども世界第一と

するものハ北亜米利加加の中の氷島ハ「ケイスルヽと云る湯を噴出す山あり沸々として白練の如き熱湯を吹上るを二十五

間余の高さに至る伊豆の國熱海の温泉は石の穴より横に
一丈ばかり噴走らし又相模箱根山の湖水西の岸に鏃子
といふ温泉場あり湯風呂より常に湯吹上るを五六寸に
至る眼病の人多く是に沐浴す
世界第一の金山を北亜米利加合衆國領の中桑方西斯
哥の港とす始めこの三ケ年ばかりの間は一年に九千万両を控
出し今にても毎年三千万両を控出し銀もまた出るあり
又北亜米利加加拿他國は英吉利の領分にて國内七十三
所の金の鑛山ありて千八百六十八年今より四年前に僅

三月の中に二百零七万二千八百六十五両を控り出せしといふ
又墺太利加「ビクトリア」國の「ハルクレースト」云へる処にて英吉利
人金山を見出し八ケ年の間に三千零四十一億一万五千四百
八十四両を控出す金鑛山多しといへども「ビクトリア」を以て
魁とす夫故英吉利の本國に金銀山絶て無しといへ
ども北亜米利加の「加拿他」と澳太利加の「ビクトリア」とより
出る処の金銀を本國へ運んで以て金銀の出る土地より
却て金銀沢山なりとぞ
銀山は北亜米利加中の「墨西哥」國を以て最第一とす今日本

支那とうふ用ゐる元銀い多くい墨西哥國より出る所のものなり
海の深さふ至りてハ山の高さより猶遠し千八百五十二年
今より十三年ゑ英吉利人南亜米利加ゑと亜非利加ゑ
との間ふ於て海底を探り則測せしふ四里二十七町あり
とゑり里俗駿ゑ洋を千尋立と呼びて深きの極めと思ひ
做せしが彼を以て是を見れば又空言とも做し難ゐ
べし

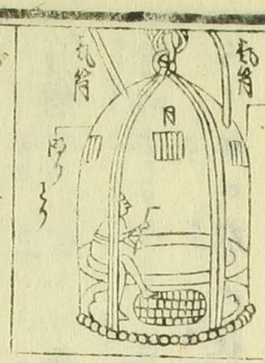
世界の大河の長さを記して其二を挙ぐ

ミシシツロー河	千六百四十余里	北亜米理加合衆國	
アマゾン河	千五百里	南亜米理加ゑ	
ナイル河	千四百三十里	埃國	
揚子江	千三百十里余	支那	
エニサイ河	千百九十里	亜非理加ゑ	
黄河	千六十余里	支那	
ヲビ河	千四十里	亜非理加ゑ	
黒龍江	九百四十余里	蒲ゑ	

○海中ヲ用ヒル器械の説

西洋人泳気鍾を作つて海の底の物を採るの便とあす
泳気鍾ハ鐵を以て高さ五尺口の闊さ八尺の鍾の形ちの物
を鑄り上の方ヲ四ツの窓を明け玻璃ヲ以て是を塞ぎ明り取り
となす又明り取の傍ヲ気を通ハす竅を設け細き管を
附て水の上まで出す鍾の内の天井ヲ数多の鉤を下げ是ヲ
人用の器物を懸け鍾の内の傍ヲ棚を二ツ也一置人その上
ヲ在りて船より俯伏ヲ纜を以て是を水中へ下すヲ鍾の内
ヲ空気籠りなれば水鍾の内へ入るをあし故ヲ水の中途或ハ

○泳気鍾の図



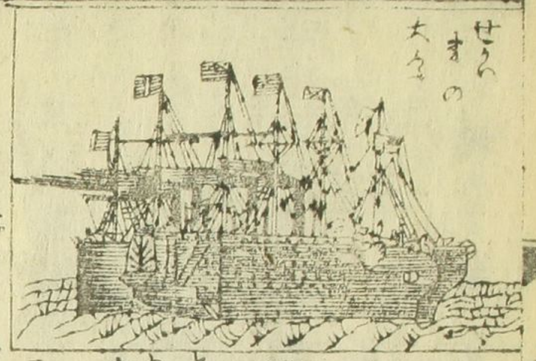
水の底ヲ在りて海中の種々の物を採る然れ
ども泳気鍾水中へ入るを三丈四尺を以て限
りとす三丈四尺より深く水中へ下るべ水の
力鍾の中の空気より強くなり鍾の内へ水浸
入るこの故ヲ上より気を添て水の力ヲ敵
せ一ぬ水の力と均ヲなるヲり鍾の内
僅ヲ八尺の空所ヲ有れば新一き気を多くされば中の
人呼吸詰り忽地死亡ヲ至る其新一き気を通ハすの法ハ船
の人気機筩を以て空中の気を取り是を桶の中へ放ち入れ

縄を以て桶をつなぎ桶の底へ皮の筒を附これを鍾の旁らに沉む
るなり鍾の中の人呼吸詰り息苦鋪みれば桶の皮の筒を採
りて鍾のうちへ牽こむ皮の筒の先を明れば桶の中の新らき
気鍾の内へ這入る也鍾の内の壞気機竅より外に散ずて人の
呼吸するなり尤て海の水い澄て清ければ日の光り下まで照
らし水の底に在りても文字書るなり鍾の内の人言辞を
傳えんと思へば鍾を扣らて是を報ず言辞多きときは板へ書
て浮べ上るなり夫故に船に上の人い皆耳を傾し目を凝して
水面を守るを最厳なり或西洋人難船して沉こし財物を

採るに此法を以て仕るに海底の財物を自在に探り得て面
白ければ孜々として休まず夜に入りても炬燭を点じて是
を為せり海底の奇魚怪鼈燈火の光りを望んで集り
来り人の手を嗅足を嗅呑噬らんと欲するの勢ある故大に
恐れ鍾を扣くを急なれば船中の人頓に引上るに奥鼈人を
逐て浮み上り水際にして散じ去る是よりして夜い此業
をなさずとす
印度國に大樹あり此木膠汁甚だ多し採りて器の用と
なすに其質堅く火水といへども傷ふを能はず刀鋸の刃も

容易い立めさー長さ一すゐ製ーと引べ一尺餘ゐ延び故
せい復縮んで元の一すとある年を経て変ぜず壊れず實
ゐ他の物の及ぶべきゐあらず俗呼んで象の皮とあす西
洋人の襪帯腰の帯あどを多くいけめを以て作る水却
衣といふ物も亦是を以て製す水却衣い着る人天窓より
足まで全らがりと包むあり脱べ儼然とーて人の殼の如
く見め肥太りてるものゐて痩る者ゐても体ゐ皆合ふ
左右ともゐ腋の下ゐ一ツの長き筒をつけ夫より生気を透
す両眼の所へい玻璃を張て明りを透して見る海の底ゐ

至りて業をあさんとするゐい此衣服を用ひとび水衣服の内へ
入うず腰ゐ鉛の錠を纏ひ足ゐ鐵の靴をけば体水ゐ浮ず
依りて水底ゐ至つて両腋の下の筒を泳気鍾の内へ搭入と
れば自然生気あるりて以て呼吸をゐ故ゐ水の中ゐ在りて
半日ぐらい動作をあーても常と変りなをあー西洋の人
戦争の折ら此法を用ひて敵の船の底へ火を繫ちて是を
沈め又い珊瑚樹珠玉とうを採るゐ尤妙用をあすあり然れ
ども間水中ゐて淹死するものあるい腋の下の筒蟠り屈ーて
気の通めを絶いざるゐ因りてありとぞ



大西洋の傳信機ハ英吉利の「ハレンチア」湾より北亜米理加の「チリ」二ツチ湾ヘ達し その距離九百七十五里ホーと深き処ハ三十五丁ばかりある海の底を引渡しるものなり この音信の早きを以方より彼方へ大抵手の脈三ツ四ツ打あひだへ達しとゝ佛蘭西ふて「ブレスト」港より北亜米理加の「ビルヽ」と云ふ地へ達し是まで大西洋の水底を千七百八十里の間引渡す此傳信機ハ英吉利にて造りし物より一倍手堅固ふ出来しゝ海の底の傳信機の長さの世界第一とゝなるものとぞ

英吉利の商社ふて出来しゝ「ゲレート、ヰースステルント号」世界第一の大艦ハ一万千五百馬力ふて鋼造りなり船の腰の両方ふ車輪を設け船の尾ふも螺旋の車を設く

一長サ　百十五間一尺
一幅　十三間五尺
一深サ　九間四尺六寸
一車の直経　九間二尺
一檣　六本

船中乗組四百三十六人乗客四千人を容れ一時ふ十八里より二十四里を走るとゝ

蒸気船の一馬力は一秒として脉一ッ打間ふ三万三千斤の重さを以て一尺の高さふ上るをいふ三万三千斤い日本の三百九十六貫目あり英吉利の一斤い日本の百二十目強あり

○世界人員の説並人種の説

昔日西洋の遊方博士あて天下の人民の數を合せ計りふ大約九百兆あり分て之を數ふれば亜細亜洲の人口五百餘兆欧羅巴洲の人口二百餘兆亜非利加洲の人口五十八兆南北亜米理加洲の人口四十二兆とふふ毎年死去するの人口を數ふれば大凡二十五兆ありて毎日死去の者大凡六万八千人一時の間ふ死去する者大凡二千八百五十人あり此割合を以て計れば三十二年ふして九百兆の人皆そく死去するふ至れば三十二年を限り世の中の人舊きと新らしきと代り合ふふ似ると思へば人の寿命い夭死する者長生するもの推しあらせば三十二年を以て平等とする故俚俗ふ人間僅五十年とふくるの言辞い短きものとの譬へ成ふけれど三十二年ふて い漸くふ其半端を過るのこ誰う寸陰を惜まざらんや

又方今の説ふてい世界の人口十億五千九百万ふして之を分て計ふれば

○亜細亜品　人口　六億五千二百万
○欧羅巴洲　人口　二億六千五百万
○亜非利加洲　人口　七千万
○南北亜米利加洲　人口　五千八百万
○澳太利洲　人口　二千百万

○世界人種の説

世界の人民容貌形体骨格各同じからず色と別つ五種あり一に莫古種二に高加索種三に以日阿伯唖種四に巫来由種五に亜米理加種とす

莫古種い其人黄色多し故に黄人と号く亜細亜品の人多く是なり　四億七千万
蒙古種人
高加索種い其人白し故に白人と号く欧羅巴の人皆是なり　四億
高加索種人
以日阿伯唖種い其人黒し故に黒人と称す亜非利加澳太利亜の人皆是なり　八千万
以日阿伯唖種人
巫来由種い其人棕色多し故に棕色人と号く印度諸島皆是なり　四千万
巫来由種人
亜米理加種い其人銅色多し故に銅色人と号く亜米理加の土人皆是なり

亜米理加種　一千万

又當今婦女童蒙の知る各國の人口の其二三を記す

亜細亜の内

日本　人口　大九三千五百万余

同　清國　支那と云　人口　凡四千。四十六億

同　印度　天竺と云　人口　独立の分　七百四十一万八千五百十二人

歐羅巴の内

英吉利　人口　二千七百六十三万七千七百六十人　英吉利に属する分　一千七百廿九億三万九千六百廿六人

同　佛蘭西　人口　三千五百四十万

同　和蘭佗　人口　三百万

同　普魯士　人口　一千七百二十。万二千八百六十人

同　瑞典　人口　三百六十四万一千六百人

同　連馬　人口　一百四十六万八千七百十二人

同　我覇斯　人口　六千万

同　日耳曼　独逸と云　人口　四千二百万

同　墺地利　人口　二百九十四億一万一千三百。九人

同　瑞士　人口　二百三十九万二千七百四十人

同　西班牙　人口　百五十八億。七千七百五十人

同　葡萄牙　人口　三百四十九万九千百二十一人

同　意太利列國　人口　二千三百十九万五千八百二十七人

同　土耳其　人口　千二百五十万

同　希臘　人口　百〇四万五千二百三十二

北亜米理加合衆國　人口　二百三十一億九万千八百七十六

同　墨西哥　人口　七百八十四万五千二百〇五

亜非利加　澳太利亜　亞の各國其外是ハ泄るハ猶後編ハ記すべし

〇男女風俗の説

世界の中ハて女の姿の異なる粧ひとする物ハ西洋の女の大袴と支那の女の短小きと日本の女の幅の廣き帶なり西洋人是を三奇風とするとなふ但し西洋の婦人の大袴ハ佛蘭西の都の巴黎斯より流行出せしなり又日本の女の眉毛を落し鉄醤を附るとも西洋人奇とするといへり

我羅斯國の内ハシルカッシアと云へる所の婦人ハ顔姿形美しく世界中の女の名稱なるよし

西洋人支那人の髪を指して長き尾と云

日本人の野良の髪の髷を指して豕の尾といふ

西洋ハていの各國とも女を重んじて男を輕くするの風習最も可怪仮令ハ客ハ往

ても女立されば男立に出来ず女立ハ男立ざるを得ず西洋の女ハ烟草を吸いざるを例とあるを婦人と同席まれハ男女ともに許しを得ざれば烟草を吸ふを敢ハず許しを得ても先づハ用ひざるを常とあす女と同席しても多く滑稽を云ハば道ふ女ふ逢へば冠り物を脱て礼を為ん夫婦家ふ在りて夫ハ奴僕の如くふ働らき妻ハ客の如くふして只自分の心任せふ日を消し更ふ家事ふ関係あいざると他人ふ整し

○西洋と東洋と事の反覆する説

西洋の國々と我國と物の相反するを最も多く撮んで一二を言んふ彼の國ふてハ女を先ふして男を後ふす名を上ふして姓を下ふす命日ふ追善供養をあさず誕生日ふハ親戚友朋を集めて饗應す彼の國ふてハ立を礼とし我が國ふてハ居るを礼とす彼の國ふてハ寝るふ蒲團を厚くし夜着を薄くす彼の國の書ハ横ふ書き横ふ讀む我國の書ハ縦ふ書き縦ふ讀む彼の國の書の讀ミ初めハ我國の讀ミ終りとす又鋸を多ふふ向ふへ推し小刀ハ刃を己の一向けて削るるを尊くふ違あらず

○世界宗旨の説

世界一般何様なる蛮夷の國といへども神ふ佛ふと祭らざる

処ろ〜其中ゑも廣く弘まりて人の尊敬する宗旨ハ

○耶蘇教　○馬哈默教　又回々教とゑ亜剌比亜ゑより発る

○猶太教　又ゼウと云　何れも一の神を祭ると以て教えとし

宗徒甚ざ多〜とゑ〜ども耶蘇教と以て第一とおすゝ宗旨開祖

より八百四十年を経て東西二派と別れ又西の派二ツゑ別れ一を舊教

一を新教とゑふ舊教ハ羅馬教又天主教ともゑふ東の一派を希

臘教とゑふ英吉利獨ひ和蘭北亜米理加の人民多く新教の宗

旨を用ゆ耶蘇宗斯繁茂する故ゑ西洋各國亜米理加ゑ加ゑて

年号を千八百何十年と記すい耶蘇誕生の年を以て元年と

せ〜ゑり然れば耶蘇誕生ゑりゑと古世界と称し耶蘇誕生ゑり

後を新世界とゑふ人生れて名と附るゑり嬰兒ゑり賀ゑり死せ〜

時ゑで此宗徒の者ハ教師の関係せざるを忌きゑり

○婆羅門教　○釋教　の類の宗旨猶教多ゑりて皆種々の

神種々の偶像を祭る是らの諸宗と一ツゑ〜て〜バガニスムと名

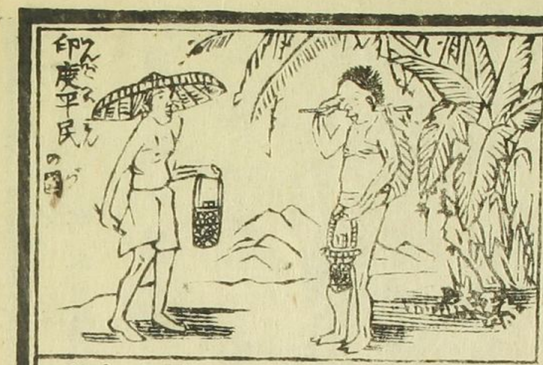
づけ猶太教回々教耶蘇教と合せて世界の四大教と称す婆

羅門教釈教ともゑ印度の地ゑ行ゑとゑ〜ども釈教ハ釋迦

誕生の地の陽蘭島ゑり支那蒙古蒲冊の方〜蔓延れり

○土地ゑ因りて人智勝劣ある説

赤道近くの極熱の地方にて四時とも木の実草の実など多ければ天然の喰料ある故耕作の業もなさず漁猟の営みも勤めず時候常に暑ければ寒さを禦ぐ衣服の手當なども及ばず又住居も密あらぬかを恐れ自づと怠惰に成り往人を怠惰に趣むき志むるに因りて曾て開化に進むを能はず歐羅巴諸国の如き亜細亜諸国より土地狹く産物も甚だ少なけれども却て万事に勉強し一人智日々に進み世に開化月々に至る史新発明の物最も多し其一の



大畧を爰に記す

○蒸気機関　○蒸気船　○蒸気車　○傳信機　○瓦斯燈

○避雷柱　○風船

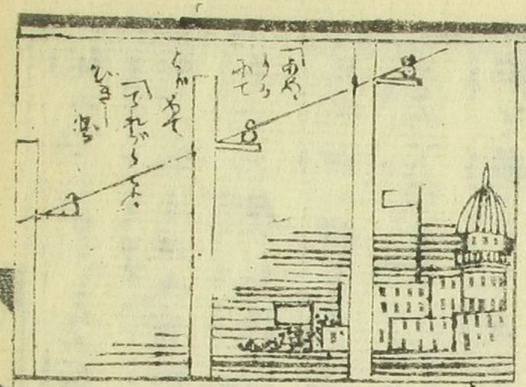
○新規発明機械の説

蒸気機関は英吉利のゼームス、ワットと云ふ人土瓶の口より吹出す湯気の勢力を計りて此工夫を発明なし二十六年かりて全き物に至りしは今より八十六年前なり此仕掛を以て水を汲干し田地を耕し山を堀り銅鉄を製錬し材木を鋸引し機を織り紙を製し板を摺り砂糖を搾へるなど一切の事業

便ず実に亜類の大機関なり

蒸気船は亜米理加合衆國の「フルトン」と云ふ人の工夫にて今より六十四年前に出来先試に亜墨利加の「ハドソン」と云ふ川を走りしと云ふ是は船の盥鰐にて初めは川船内海の渡し船などに用ひられしが終に軍艦船飛脚船などにすに至れり

蒸気車は英吉利の「ジョンジ、ステフエンソン」と云ふ人の工夫にて今より五十九年前に出来夫より十三年過て鉄道の工夫を発明し「ストックトン」と云ふ処より「ダルリントン」の間ぶ二三里程の所に鉄道を通じ蒸気車を用ひられしを始めとして日を追て盛大に



なり遂に英吉利の蒸気車の数七百に百鉄道の長さ千百里に亜米理加合衆国にも鉄道の長さ四千八百十六里に成る

伽伝機は仏蘭西の「ルイ、ヒジ」と云人の発明なりと云へども未だ全く物に成ざりしを合衆国の「モールス」と云人人に年の月稽を工夫せしに因て大いに見て改正今より廿七年前合衆国の首都華盛頓府より「バルチモール」府まで十七八里の間に線を敷て友府の消息を報じられしを始めとして又海の底に掛るに今より廿年前英吉

利の「ドーウル」より仏蘭西に移り始めて英吉利に
西洋各国亜米利加にも珈琲の巣のごとく引張既に英吉利一
国中の伝機のみにて長さ二万九千百里に及ぶ人
兎形地の獨乙国の「ウヰンツル」という人英吉利の首都倫敦に於て
工夫を設け今より六十六年前初めて油燭の代りに用ひ市
街を照すに成功せり後瓦斯を蓄へ亜ら布に火を
発し夫が為に人多く扶害せり右一度止むべきに今より二
十九年前に初められし如き事今日に於ては西洋各国亜米利加の国に
も見て用ひざるところなしとの尾部地中より愛を切て

石炭の気を通じ往来まさい門口の常夜燈家の中の掛行
燈の様なる処へ皆悉く用ゆるあり然れば西洋各国とも都府の町
い夜に入ると瓦斯燈を点じ連らね遠く之を見渡せば其風景いと美
しく実に人目を快らしむるに絶えり
銃炮並火薬の発明は千四百年の頃喧嘩巴人の工夫のうを以て世
間に流布するとなれども然に非ず「キリヌ」紀年に漢の人の発明あり
しを喧嘩巴刮の内普魯士国の和尚「ペルツルド、スチワルツ」という人猶
改正して千三百四十六年の戦争に始めて是を用ひ大いに勝利を得る
るより喧嘩巴各国日々に工夫を凝し月々に発明すること多く種々

の便利を盡しらるより戰爭の勝敗い只此一機械ふありと終ふ
鎗劔を捨甲冑を廢すとといあるらう然れば此器械ふ限ら
ず諸物ともふ発明の起原い多く漢土ふありとなども事皆
彔ふして其儘置しを嘔囉巴人此法ふ基き種々の工夫を
加えて以て終ふ深妙の奥旨を極むるい究理学の行るゞ
故なりけり

西洋見聞圖解巻之下

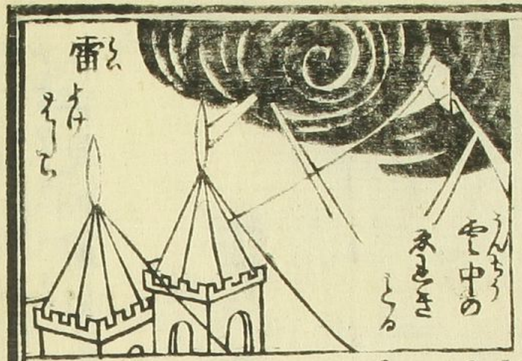
東京　瓜生政和編集

○避雷柱並風船の説

避雷柱い合元亥の「仏蘭克林」と云人今より百九年おふ夏
の日の驟雨雲の中へ「エレキトル」と及ふ仕掛の凧を放ち
雷雷ハ雲の中の「エレキトル」の石低るゝと知り終ふ此害除
柱の工夫を爰ハ設せとらん害避柱い雲の中の「エレキトル」を
柱の先の尖りへ吸ひ夫より亦鉄へ吸ひ下げ水の中ゟ地の下へ
爰するゝ然れども雲の蔭来ると吸ひ去る雲ふ蔭ら

雲の中の「エレキトル」と吸ひへらゝ雲のはらゝぬ雷の発らぬ雷ふ有るの機械あり

風船は此度の上ふ國を乗るが如き大いなる袋の中へ元気より一倍拵を水蒸気の気と龍め茂の夢ふて拵へる然の如きものと船とるゝ其の上ふ乗りて空中へ昇るあり英吉利の首都倫敦ふ「堪連」といふ者あり風船ふ乗を業とする女子供と又ども其名を知らざるものあり風船は空と凌いで漸とふ昇り



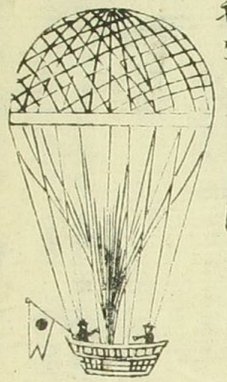
直ふ浮雲の上ふ出て俯して足下せば山川城郭の風景小美ふして箱庭の如くあり猶昇りて竟ふ七星の高きふ至るこゝて風船の止りとす又空中ふ居て久しきふ至るも二夕時半位と限りとす「堪連」ある夜藤床の下ふ數百の燈籠を下げ球を故つて空中ふ昇る地下ふ居て是を見るふ德星の大空ふ聚るが如くあたゝ見物人手を扣き仰ぎ望こて明きらる口を塞くを知らず風船は猶次第ふ昇り東の方を見ゞ赤ゞ夜中どろあるふ日のはるを見る因りて地上を下り見るゝ猶漆々然とし暗深く更ふ物の目ふ觸るを覚りしとゞ

又或日大風の時風船を乗り上げ風に随つて横に飛ぶに英吉利より海を越して南の方佛蘭西を過ぎ日耳曼國に入つて止る其道程凡二千里余をもどる僅に數時にして至る

風船は平常の風にて走るべ一時に二百里を行或ひは二百四十里を往く大風にて吹送るべ一時に五百里を往きまた六百里を行くという順風の中に忽地風を轉じて吹回すとあるべ風船に乗るものは必ず風雨鍼を持て暴風を除け寒暖計を以て気候を驗え空中の高さを計るを專一とするなり

或人風船を放ち空中に昇り行しに初めは地に近き時は雨の降を見ること一里ばかり昇りて雹の降るを見ること一里ばかり昇りて雪の降を見る又一里ばかり昇るべ日の光り晴明らかにして大空に織わたの朦気もなく下を見るせば雲重り合て白く綿の海の如くなる中に電閃めき雷の轟くと覚ふ又上るを數里にして天地一色物の見るべきなく其人口呼り息つまり寒気甚しく頭腫耳聾煩ひ悩みて心苦しきを

風船空に昇るの図



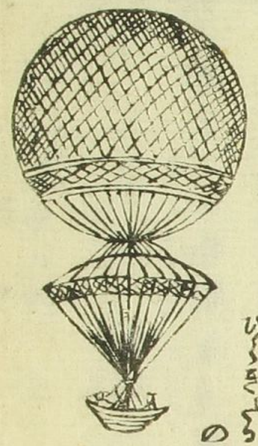
譬へるに物あり〜勢え昇りて〜処の鳥半ば龍の中にて死す
是全く空気の薄き境界に至りて〜空気生を養ふに足ら
ざるなり

又一人の風船乗り白鴿を藤床の中に携え藤床の下に一ツの
傘を掛け傘の下に一ツの筏を掛け筏の中に小犬を載せ
て昇り空中稍遥かなるところに至り刀を以て藤床の下の傘
を切落せば傘と共に筏の中の小犬漸々に落漸々に低くなり
往とき忽地大風吹発りて〜傘ども昇り風船の
畔に来る筏の中の小犬主人を見て頻りに啼くい援救を求る

に似たり風頓に止まるとバ今再さび落下つて犬悲ぶなり又
昇って白鴿を放つに鴿敢て飛動らず故に鴿を推て空中に投
とバ石を落すが如く稍地上近くに至り翼を振ひ旋り飛是則空
気薄くして毛羽の軽きを糸まるに足らざるなり依て空気濃き
ところ迫下りしらべ漸くに乗ることを得しものなりとぞ
英吉利にて戦争有りし時敵と営を対して陣取りしに敵勢
の虚実知れざるバ一艘風船に乗り敵陣を下し見て旗を舞すを
以て號令となすを約し終に敵陣の上に至る敵兵空を望み
鐵炮を打かけるを頻りにとども高くして王届らず風船の中の

一將空中ニ在て指揮を兵軍兵旗を望んで進擊し大いに敵
軍を破りしとい
人二人あり風船を作り藤床の下に一つの傘と一つの筏を設け一人は
上の藤床に乘り一人は下の筏に乘り空中へ昇ること大約二里ばか
りして藤床の人下の傘を釣し物を切て上下二つとなし之に下
の傘工合違ひて定らず猛に落下りて直ちに地上に至り筏の
人泥の如くになりて死す上の藤床は下の重を放ち故に幸然
として突昇ること矢よりも早く是なる藤床の人魂魄消し乘て
夢中なるが如し良久しうして船始めて定り之に於て球の中

の気を洩らし慢りに船を下し漸ど繞倚にして死を脫れとなる
又一人風船に乘りて大空遥のところへ昇りしに気を籠る袋球
破れさるべき傘を以て風に乘じ下んとするに割ちず傘を操り
纔一本切れさるべ藤床傾きくるくる旋りて落るべ其人眩眩暈
絶入らんと欲して地に至り僅に命存りと云ふる數日の間物言ふ
を能はずしとあり実に風船は危険の甚しきものなれば是に乘る愚純者と
して慢りに風船を放つをは西洋各國合衆國にても禁制に置とぞ



風船巨傘の圖

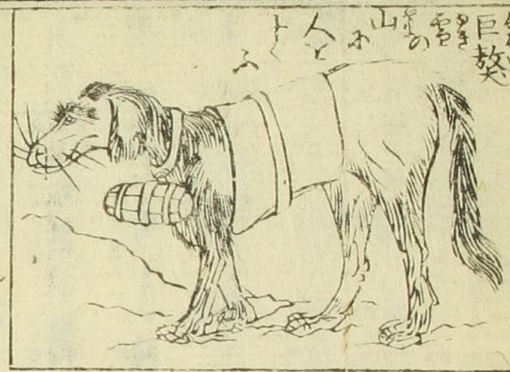
○獸類の說

西洋人犬を愛すを普代の家顔の如くホーて他行すとゝ必らず是を連る犬の種類數多あり小なるものを犬といひ大なるものを狗とのひ取分け大いなるものを橇とあす犬の働き最も多く車を牽ませ羊を牧せ人を救ハせ夜を守らせ盜賊を捕らへ猟を助けさするなど挙て筆へ難し北極近くの地ホ至りて冬ハ雪深きを數尺廣野千里望こ足れい銀の海の如し是を往んとすとゝも路の尋ぬべきなし此時雪車ホ乘りて犬ホ曳しむ犬七八匹ホて一ツの雪車を曳く行る迅速なり奥蝦夷唐元の地も中程より先ハ冬ハ至れば

雪深きゆへ雪車へ乘り犬ホ引せて往来するなり

喘吁國と噫吸哩國の境ひホ峠あり嘔嚔と云て至極の難所なり

両國の商人この峠を越すもの常ホ絶るなし山の路崎嶇として冬ハ風寒く霜強く旅人寒気ホ凍へ険阻ホ疲れて足の進まざる折ふし雪降りいで終ホ雪のゐホ路中へ埋められ或ひハ半途ホ大雪ホ逢て進退きハまり路の傍の坑窟の中ホ身を屈居るうち竟ホ身体凍ゆるホ至るもの間あり因りて峠ホ大いなる小屋を建て多く巨獒を養ひ其犬を以て雪ホ埋る人を救ホ大ハ毡裘を身ホ纏ひ酒の入うつ樽を項ホかけ往来へ出て



嗅々走り回りて雪の中ゆ人の埋りて在るを知るとゆ獒忽地ゆ其処を掘り人を出し側ゆ蹲居て人の気の付を待人蘇生るとゆ犬の首ゆ懸る酒を呑犬の毡衿を取りて着るゆ及ゆ於て犬らの所を去り小屋ゆかへる人若し凍て死もるとゆ獒走り帰りて小屋の番人ゆ是を告一匹の灵獒ありて旅客二十二人を救ひしらゆ好事の者金を以て鐶を拵へ獒の頸ゆ名の文字を鐫りて其功を記しるとゆ

乳母あり小孩を抱いて橋の上ゆ立詠め居るしゆ孩児喜して躍踊りしゆ乳母手を外して小児を水中へ落す傍らゆ抹匈匈居る巨獒水中へ乗入り泳ぎ舟て忽地ゆ其児を咬へ来りて以て難をく是を救ひしとゆ

西洋諸品とゆ羊を牧して生活とするもの多し或ひハ数十或ひハ千百を以てす羊晝ハ山ゆ遊んで食を求め夜ハ野へ出て森ゆ止羊の主人大と多く養ひて羊の守りとゆ若羊亡るをあるとハ犬をして尋ね覓めむゆ万ゆして一度も探し当らずと云ゆをゆしとぞ

又血犬と号るものあり其鼻善く嗅ぐ偷兒家に入り物を盗くで逃去る主人犬をしてその足跡を嗅しむるに百里の外と雖もよく嗅付て是を捕へしむ又羊を亡かの家あり是を飼ふ者犬をして賊の跡を嗅しむるに犬へ嗅々道を求め果して数里の外の郷村に羊を盗こしものを捕へるを得たりとか

一人の医師あり路に跛る犬を見る呼で之を家に連戻り試に薬を以て療治せしに数日にして愈るを約とす故にその主の家に返す後年に犬別に一匹の跛の犬を連れ

来り医の家に至り尾を揺らし鼻を鳴らし療治を求むるの体あり医師再び藥を以て療治し愈るに及び二匹の犬依喜いさんで此処を去れりとぞ

又医師あり獨り野路を往に巨蟒一疋蜷まといて従ひ来る医師是を呼び尾を揺り目を細くして故を逢るが如し医師竊に二を奇として彼の犬を連ゆくを数里時に賊三四人剣を抜乃を掴て医師を捕へんとす医師驚いて蟒を呼ぶ蟒賊を噬て猛勢あるべ賊狼狽て走き犇くうちに医師逃れて帰るを得たり是に於て彼の蟒を止めて養へとあるに蟒逃れて

去り終不往ところを知らざるなり

象は亜細亜弱の南より産す亜非利加弱の中に産す身の丈は一丈高さ七尺力は馬と九匹寄せしより強し大窓大いなる耳長く垂れ鼻は五尺牙は七尺あり鼻の先に小指を出し人の手の指の如くに働く寿命は百年の餘を保つ鼻を捲て樹を抜き農夫の蔬を抜き手軽し熱き時は河に入りて身を浸す常に群をなして山林を横行する一群々々に王あり或ひは数十或ひは数百ある王の後に従ひて王を尊敬すること甚しく王行けばこれを行王止まればこれを止まる象

大象の図

連れて河を渡れば並んでこれを鼻を空に伸立行由一遠方より見れば河の中に肉の柱を建し如し象を囚るには象の路に陥阱を作り置て是に落す象坑に落て怒る甚しく然て逆々腹の空るに至り漸くに疲る此時に此の上より草を投げ与へて養へば象食を貴ひる恩に感じて次第に馴れる十餘日を経て坑より出し家に連往て飼ひ象と一ツに置ばこの象再び山林に棲なるの念なし また一ツの法に象の春情の附くる時飼象の牝を

野象の居るところに故し置て象奴穴を掘りて其中に隠れ居るなり是を足て野象の牡来りて牝と交接に至り親しく馴て餘念なき時機を窺ひ象を縛ひ綱に坑より出て大縄索を以て象の足を繫ぎ然して是を馴すに食を与ふる以て為なり象なれて後索を解て家に連まろかるなり象を繫ぐに象の頸と項とに跨り座し鉄の鞭を以て言を聞ざれば耳を刺もあり印度にて戦争の時象を用ひて鐵砲を拾しむとて

裏に一軒の衣服を製す兄世あり職人大勢衣服を拵らへ居るなり門口へ象奴象を曳来り休ませ居るなり象は鼻を伸し彼の衣服を製す兄世の床の上へ来せ置りれば職人ども戯れに鼻の先を針にて刺けれとも象は痛さとも知らぬ振りして頓て此処を往なりしが戻りに及び何処にて泥水を口の中へ含み来り彼の兄世のおへ来ると鼻を刺る職人の天窓の上より泥水を噴あびせて往是を見るもの皆手を叩いて大いに笑ひを催しなりとぞ

又一ツの象あり怒り狂ひて棚を躍り出す路往人を忘まて逃走る一人の女児を連まて此処へ来りしが餘りに狼狽けまして兒を置て傍へ逃る衆人を早く兒を助け来れといふ女大いに

驚き兒を連れ往んとするに象忽地にして來れば此兒象の
をめに殺されんかと憂ふ象その兒に走りかゝる殺人嗟やと
兒の中に象は鼻を以て兒を抱きて路の傍らの石の上に置て
過ぐ殺人こゝに怪しんでその故を彼の女に問ふにこの女菜を
賣を以て生活とするに象に遇ひて菜の賣餘り多くれば
与えしに因りて斯恐れる中にも又能恩を忘れず兒をうゝ
よせしものからんと云へり
又某の家の奴婢ひ誤つて象の鼻柱を強く撲ふ象怒りて
是を殺す象主の妻兒を抱いて象のおに來り大いに歎す

吾夫家貧しきが故に身を屈めて牧と成つてその日を送ふ
ふ今汝猛悪を逞うして吾倘まこと此子として使ると云
らむ汝この子の父を殺す迚ものゝ子も殺せと言
て抱きかゝる兒を象の下に置くに象は頭を垂れ良久しく
盥えたる如く成りしが傾て鼻を以て兒を巻て我項の上に
置その心は此兒をして父に代へ牧とあさしむべきものゝ
からんと思ひ彼の象の主人其兒を以て牧とあすに象
まこと先に比ぶれば柔らぎ馴て自由につかはるゝ
ふ

獅は亜細亜洲の中印度の辺又南亜米理加ふ
産す身の長四尺高さ三尺餘首より尾の
先まで長さ八尺その状ち獰悪地ふ蹲して
大いふ吼れば声遠雷のごく百獸これを恐る
牛と捉へ馬と搦へて背ふ負て走る威を
奮って一蹄蹄れば牛馬の背こを裂け骨摧
けて死す氣を凌ぐをは能く數日を堪ゆれども水を必らず一日ふ
一度飲ざるをと得ず一人の黒人牛を牽て水を飲せ居るふ池
の中ふ二ツの眼の玉ありて光り曜き黒人を視詰て更ふ目こをき

せず黒人飢ゑる獅をを知り牛を捨て疾く逃る獅果して水
中より踊り出て牛を撞て倒して牧奴を逐ふ牧奴たやく
木ふ上って避る獅木の下ふ蹲居り仰き望んて涎れを流し
一日一夜守りて動らす漸渇ゆるふ至り水を呑んと泉ふ赴
る式間ふ牧奴走って逃帰る獅また故の所ふ至り跡を躡で
直ちふ牧奴の門ふ来り次の日漸くふ去りぬと云へり
虎身の高さ三尺首より尾まで長さ七尺声能物を振ひ力
よく牛を負て走る亜細亜洲の中の印度新嘉坡蘇門荅
立の地ふ最も多し今より五十年ゆど前ふ英吉利領の

印度ふ於て人民虎の害ふ逢ふの多ーゆりて英吉利人虎狩をなしめ一匹の虎を捕獲るのふい元銀数十両を以て褒美ふ与へんとすべーと嘱けとバ土人なる大いふ奮発ーて勝ーく虎を狩取りけれバ一年の内ふ褒美金七万五千餘去ふ及びしかれども其猛類を絶ようを能はず近年ふ至りてまた蕉父放人などの害ふ逢ふもの多ーとらへり

蘇門答立の地ハ猫猴甚さ多く群れ集りこる猴虎の来ろを見ると狼狽走つて皆木ふ昇る虎是を逐ひ樹の下ふ到り仰いで目を睜り一声猛ふ咆哮振いされば猫猴忽れ慄いきる技を放れ足幹を外ろを知らずして悲ぶり落ちを木の菓の如ーとらへり

南亜米理加ふも猴至つて多き所ふーて木の菓熟する時ハ群をなーて来り普時ふーて一木を尽ーて採り去る始ドあ木の実を取らんとする時一足の老猴高きところふ登り四方を見渡ーて張番をなーて然ーて後ふ群をなーて列を立て猴出来ろり木ふ昇りて菓を採り頃刻ふーて挙ても又他の木ふ移りて採るとき蕉父狩人なとを見掛れバ張番の猴一声叫ひて他の猴ふ知らすれバ群猴急地

散じて跡を見せず若彼の足張番の猿人の来るを見損んずるあれば巣へ帰りて後多くの猿寄り集りて是を打殺すとなり狡猾なること斯のごし

虎と豹と発とに似たる獣

豺狼い何れの國ゐも在りとのべども我羅斯の地辺最も多し丈け三尺高さ二尺狼群連つて往来す一個の人馬車ゐ乗りて山ゐ住しゐ路ゐて多くの狼頭われ出で馬車の後べゐ着き来るその意間を窺ひて採り食らんとするゐあり是ゐよりて

その人大いゐ驚れ懐戦魂魄縮えてあす術を知らず然るゐ車の中ゐ長き麻縄あるを見出し其索を以て窓の外へ幾重とも堅く結びつるゐ殺くの狼を佇えて望と居るりしが是必らず網罠を張るあらんと疑ひしゐや皆悉く散じ去れりとのべり

俄羅斯國ゐて一隊の騎兵馬を双べて往しゐ殺くの狼漸々ゐ出来りてその隊を圍む各鋭炮を発して以て百餘匹を打斃すとのべども狼猶何処ゐ集り来り圍こを厚うして弥去らず爰ゐ於て終ゐ弾薬を打尽し狼のるゐ

皆喰殺されしが其慘毒の甚しき斯のごし

歐羅巴の北地（ランキュードツクの諸山い雪深き故ゐ冬ゐ至れば狼食ゐ飢て人と害するを甚多し英吉利の魯敏遜といふ人漂流の島より故郷へ帰るゐ十一人を従ぐ皆馬ゐ乗りて此処へ来りしゐ案内者一人先達て進み往と大いなる狼二頭不意ゐ飛びつて一い人ゐ噛付一い馬ゐ噛付普陵とりる者是と見て早く炮を発し二頭の狼を倒せば余の狼散じ去る爰ゐ於て急がせ往と数里ゐして日既ゐ暮んとするゐ狼の長吼頻りゐ聞ゆ因りて十二人の者皆

銃を備へ眼を配りて往暫くして恐狼百頭むらり整々として向ひ来るさま良將の指揮を得て隊伍を配るが如し故ゐ馬忍ち進こを得ず十二人の者炮を発して狼六頭を斃し多く狼ゐ傷付ければ余の狼こゐ散ず十二人の者鯨波の声を揚て威を示し往を又一里ばかりゐして日既ゐ暮るゐ時ゐ狼の長吼するを夥ゐければ衆人四辺を窺ゐ見れば度い猶数百ゐ狼三面より向ひ来り遠巻ゐ囲こ隙間あらば馬ゐ乗りうんとす十二人の者弥叫んで威勢を付進こ往ゐ狼次第ゐ群て増し其数三百頭ゐ過ぐる然して早乗りうんと乗るさ

あれば大材の倒れるを足付僥倖是とふ捕とるし各
銃を構えて待又狼の来るべき方へ火藥を伏せ置くり
時狼いよ〳〵迫り来り火藥を伏せる辺ふ集る因りて各
銃を発して先六頭を斃す狼怒つて皆めらんとす時ふ
一発火藥ふ當り火藥忽地発して狼是ふ斃され死する
者甚多し火炎の猛烈なるふ恐れしふや狼散じ去りて
又来らず漸く難を逃るを得る比時狼を殺すを七八十
頭傷付るもの百五六十頭ふ及びしとぞ
駱駝ハ亜細亜洲の西北月西亜上耳其伊勢千後藏埃及トル

最も多し歐羅巴亜米利加ふハ絶てなし力強くして重荷を負
ひ遠く往常のものハ一日ふ八十里迅るものハ一日ふ三百里を
往壯るハ千斤を負ひ弱きものも數百斤を負ふ人荷を
附んとすれバ駱駝膝を折りて荷を請く荷の重さ我力ふ
足りれば起若し其荷重くして我力ふ過れば鞭撻とゝども
起て往をなし寿命ハ五十年ふ過ず水の在るところハ臭を
以て嗅て十里外のものと雖ども是を知る其腹よく飢を忍
ぶこと数日又咽を乾らすをなし胃の中ふ別ふ水嚢ありて
爰ふ清水を貯へるを十餘斤自ら咽の渇くときの用ふ備

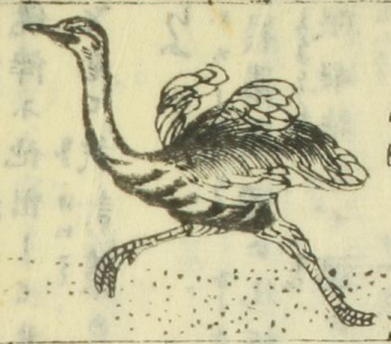
或商人駱駝に乗りて沙漠の地を過るに更に一滴の水もなれば咽喉渇きて死せんとするに至る故餘儀なく駱駝を殺し胃を割て水を採り是を飲で命を助りしといふ沙漠土番の地にていい駱駝を陸舟といふ人を乗せ荷を負ふの功あるを以てありその性能忍び耐るといへども慢りに是を責れい訊を返すの智慮あり或暴人駱駝ををひ苦しむるを最も甚しく然れども駱駝怒りを忍んで常に變らず体をし夜深く人静るに至り駱駝囲を出て奔つて彼の者の寝る処に往その衣服を皆てく噛破る此時彼の者

俄倖に他出して其処に寝ず外よりして帰り来る駝是を見て我計策の成らざると知り終に自ら気死するとなり

栽羅斯國の北極に近き地は寒冷にして氷雪常に消ず硯凝結んで錫の如し弥北に往ば氷雪の山高く聳へ四面玲瓏として堂明畏るべし一時暖気のあり氷山崩れ陷て中に死しる獣あり孤狐古き特の如し家より大いにして骨肉鮮新し熊争ひ聚りて是を食ふ土人馳集つて國王に告るを報ぜしに王博識の者を召し

是と験せしむるふ二十年と経し物ゑらんとりく因りて
其骨と博物館ふ投め今ふ傳えて古器とあすとぞ

○鳥類の説



駝鳥平沙と
いきるの圖

亞細亞洲の中の大沙漠曠野の地ふ羽あ
つて翼ふき鳥を產す駝鳥といふ其走る
こと馬より早し怒れば蹄を以て障踢物
遇へば追ふけ足を以て砂石と抓後方へ
い其勢ひ鋲炮玉の如し是と受れば
傷と象ふ又一種亞非利加洲ふ產す

身の高さ七八尺養ひ馴れば荷を負して使ふ其用馬の
如しといふ

俄羅斯國ふ產する鷲あり嘴と尾ふ至りて四尺両翼を
伸れば一丈ふ及ぶ或山の下の家の椽の先ふ孩子の遊べる
あり時ふ大いなる鵰空中より突き下り孩子と抓き浚ひて
乗去る半空ふ至るまで猶孩子の泣声を聞く其母ひるーに
骨髓ふ迫り足ずりして大路ふ立彼の大鵰の往ところを
視れば大鵰い孩兒と絶巖の上ふ置岩石千仞ふして如何
ともあすべきようなし爰ふ勇気の人あつて力と極めて

絶壁ゝ攀登るとゝども果さず山の半腹より返り来る
その母身の危やきを顧ずず葛葛の蔓ゝ掬り岩石樹
の根ゝ採附て命を極めて終ゝ山の巓ゝ至れば果して
孩子骨朶の中ゝ卧ゝり衣服血ゝまゝり啼入りて息
絶んと欲す爰ゝ於て母い孩兒を懐中ゝ抱いて辛ゝて
山を下り孩児生るを得ゝりとな

聞見図解下終

東京書肆

製本所

本銀町四丁目

須原屋茂兵衛
山城屋佐兵衛
小林新兵衛
山田屋嘉七
岡泉屋市兵衛
和泉屋伊八
和泉屋金右衛門
須原屋勘右衛門
和泉屋慶次郎
藤岡屋治兵衛
森口藤兵衛
山田屋青右衛門
鶴屋庄五郎
九子屋正兵衛
丁子屋善五郎
丁子屋忠七郎